

国文学科「マス目のなかの物語」

レポート
第1回 2014.
10.11
[sat]

実践女子大学は2011年、梶井基次郎の名作短篇小说「檸檬」の下書きを含む草稿群（「瀬山の話」）約80枚を購入。「檸檬」誕生の秘密に迫る調査を開始しました。2014年10月6日～26日、渋谷キャンパス開設記念としてこの草稿群を特別展示。これに合わせ、本学教員が作品や梶井基次郎について解説しました。回の最後には、本学教員による特別展示のご案内（ギャラリートーク）も行われました。

《第一部》幻の「檸檬」草稿（瀬山の話）出現！

梶井基次郎の死後、「檸檬」を含む未完の遺稿が発見され、「瀬山の話」と題して活字発表されました。本学が入手したその原稿には、編集の跡が多数残されています。「瀬山の話」は梶井が望んだ作品のカタチだと言えるか？未完原稿の豊富な可能性と「檸檬」の謎に迫りました。



講師：河野 龍也氏 実践女子大学 文学部国文学科 准教授

■一次稿と二次稿が存在した「瀬山の話」

梶井基次郎には、作品の構想を手帖などに書き留め、原稿用紙に書き換える習慣がありました。本学が入手した草稿（「瀬山の話」）もそのようにして原稿用紙に書き換えられたものであり、短篇小说「檸檬」はもともとそこに含まれているエピソードの一つでした。

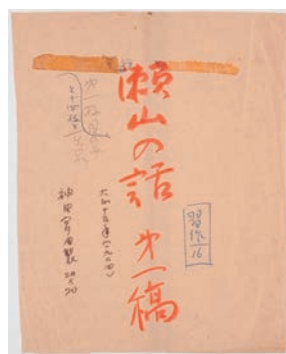
「瀬山の話」は梶井の死後、第三高等学校の後輩であり友人の淀野隆三が編集して発表しました。本学がその草稿を入手して研究したことにより、「瀬山の話」には一次稿と二次稿が存在した、ということが浮かび上がりました。両者を比較すると、梶井がこの作品をどのように作り上げようとしていたかが見えてきます。

第一挿話（Aの談話）が後に「檸檬」となるもので、第二挿話では主人公瀬山が二人登場する幻想的な話が展開されます。最後に、「私」のもとに瀬山から手紙が届き、「私」は瀬山を想いながら書いたものがこの物語であると作品の成り立ちを言及して終わります。

このように、一次稿では話が進むに従い、主人公の名前がAから瀬山へと具体名が変わっていきます。そこで二次稿では瀬山への統一を図ったようです。しかしこれにより、「Aは『私（語り手）』」のではないか」という、アイデンティティの不確かさを物語ろうとする梶井の構想が崩れてしまった。そして小説を書き続ける推進力が失われ、未完の作品となったのではないかと考えられます。

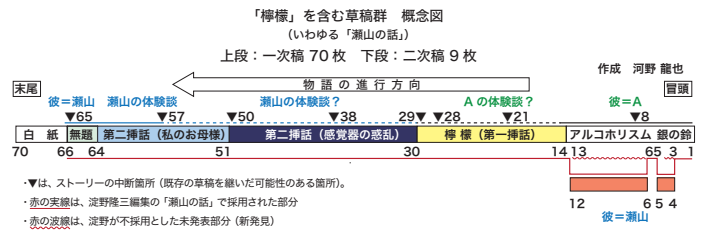
草稿79枚の出現

- ・ 淀野隆三が「瀬山の話（遺稿）」として発表（1933年）
- ・ 短篇「檸檬」の完成直前の姿を含む未完の長編として注目



■梶井は「瀬山の話」をどう構想していたか

一次稿は梶井が手帖に書きつけた複数の構想をつぎはぎしたもので、断章形式でそれぞれに小タイトルをつけながら長編にできないかと試みていたようです。冒頭は「銀の鈴」という小タイトルがついたもので、語り手「私」が奇妙な友人A（主人公）について紹介します。



■挿話から短篇小说へ昇華された「檸檬」

梶井はこの作品の中の一部を短篇小说「檸檬」として同人誌「青空」に発表します。この際、表現がかなり磨き上げられたことも、草稿の研究で明らかになりました。

草稿の挿話にはお金の話など現実的な話も出てきますが、「檸檬」からは削除されています。代わりに付け加えられているのが“それからの私はどう歩いたのだろうか”といった文章で表現される浮遊感です。

完成した「檸檬」は、“得体のしれない不吉な塊”などに象徴される「重い私」と、ふわふわと街をさまよう「軽い私」の双方が描かれています。“紡錘形の身体”と例えられる檸檬を爆弾に見立てるシーンは、自らの身体からの解放を求める主人公の心、この重い身体さえなければ自分は好きなどころに飛んでいける、という願望を描いているのではないのでしょうか。

《第二部》「檸檬」の青春

「檸檬」の舞台である大正中期の京都は、第三高等学校の学生だった梶井基次郎が青春時代を過ごした街です。第二部では彼の生涯や学生生活のエピソードを振り返り、若き文学青年が手帖・ノートの中に書き込み、構想した作品の系譜を、ご来場の皆さまと一緒に紐解いていきます。

■梶井基次郎の生涯

梶井基次郎は、1901年に大阪で生まれました。名門・旧制北野中学校で学び、第三高等学校（三高）に進学しました。彼は病氣療養等による2回の留年を経て、5年をかけて三高を卒業しますが、ここで過ごした時間が文学的才能の開花につながったと見ることができます（詳しくは後述）。三高卒業後、東京帝国大学文学部英文科に入学。仲間とともに同人誌「青空」を創刊します。しかし持病の結核が進行し、伊豆の湯ヶ島温泉に療養に赴きました。1928年に東京に戻りますが、病氣はさらに進み、秋に大阪の実家へ。1931年には淀野隆など友人の尽力により、初の作品集「檸檬」が刊行されます。そして翌1932年、肺結核により31歳で亡くなります。

■第三高等学校時代

梶井は三高に入学して中谷秀雄や飯島正と出会い、夏目漱石や谷崎潤一郎に傾倒しました。しかし酒を覚え、遊郭通いもするようになって生活は荒みます。1年次・3年次に留年しますが、2回目の3年次の荒んだ生活を描いた作品が後に「檸檬」となります。

こうした日々を送る一方で、梶井は創作を始めます。彼は思いついた案をまず手帖に書き込み、それがある程度カタチになると原稿用紙に書き写していました。手帖と原稿用紙の原稿には、さまざまな違いが見られます。大きな違いは句読点で、手帖の場合は句点も読点もなく、ただ黒い点が打たれています。原稿用紙に書き写す段階で句点や読点が打たれることから、梶井にも原稿用紙の原稿が正式なものだという意識があったようです。

三高時代の作品には、2つの系統があると考えられます。1つ目は、母親に対する贖罪の意識を綴ったものです。梶井の母親は父親が他でつくった子どもの世話をするなど非常に苦勞した人で、それを

講師：梶田 輝嘉氏 実践女子大学 文学部国文学科 教授



知る梶井は当然母親を困らせたくはないが結果的にそうなっていない。その苦悩を書き綴っています。2つ目は、京都の街をさまよいながら、その中で出会ったいろいろな出来事を描いたものです。本学が入手した草稿（「瀬山の話」）も、この流れを汲むものと考えられます。

■「檸檬」をどう読み解くか

「檸檬」は高校の教科書にも採用されている有名な作品ですが、その解説はなかなか難解です。特に、「得体のしれない不吉な塊」が何を指すのかについては、研究者たちの間でも意見が分かれています。

この作品の背景となっている大正末期から昭和初期はデカダンス（退廃）の時代であり、社会に憂鬱な空気が漂っていたものと考えられます。従って「檸檬」を読む際には、そうした“憂鬱を読み解く”テクニックが求められるのかもしれません。

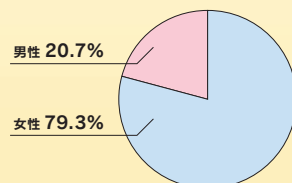
【公開講座アンケートより】

幅広い層から「わかりやすい」「新鮮な視点で発見があった」と好評をいただきました。

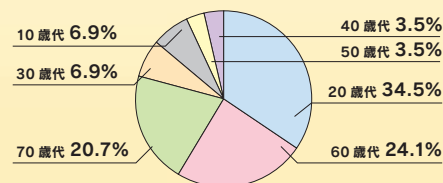
【寄せられた声】

- 「瀬山の話」が未完となったのは作品の構造に問題があったのではないかと、という話に驚いた。また、これまで知らなかった梶井基次郎の人間性を知ることができ、面白かった。(20歳代/女性/その他)
- コンパクトでわかりやすい解説だった。原稿展示のタイミングに合った公開講座で、野分の来襲を前に快い時間をいただいた。(60歳代/男性/その他)
- 文学にあまり縁がなかったので、とても良い勉強になった。(70歳代/女性/渋谷区在住者)

〈性別〉



〈年齢〉



〈属性〉

